近世における甲州郡内領と 上州桐生領の織物の生産構造(その1)

奥 山 好 男

Hierarchy en Manufacture-Féodalité

Yoshio OKUYAMA

Au Japon du 16^e au 17^e siècle, il exista manufacture du système féodale dont des seigneurs firent ses serfs fabriquer des soieries. Alors, dans ce régime, des plus supérieurs seigneurs gerait des moins supérieurs seigneurs.

Par exemple, en percevant des soieries en guise de redevance (loyauté, taxe, impôt foncier), le gouverneur (le plus supérieurs) du domaine de Gun'nai dirigeait des seigneurs (manufacturiers) et leur faisait produire des articles à son ordre. Et, il vendait sa marchandise à Édo (Tokio). Avec la commutation de redevance, il s'éloignait de cette production. Et des autres seigneurs, ils en étaient de même.

Pour cela, des plus inférieurs seigneurs et des inférieurs travailleurs qui avait été des serfs vennaient des producteurs independants de cette marchandise. Par exemple, à Kiryû ils étaient des prototypes des producteurs capitaliste qui valent que leur appeler bourgeois. (Vraiment des manufactures, elles en étaient manuelles même, mais au bout du 19^e siècle elles en vennaient mécaniques.)

I. は じ め に

すでに筆者は、1964年の発表¹⁾において、農地改革前後にもなお農奴制的経営が林業に存在していたことさらにそれと同時に、農奴制的経営をおこなっていたところの経営地主が、寄生地主に転化する方向ものさしていること、などについて論じた。

また、最近の論文²⁾では、近代において農奴経営が林業のほか畜産業にも存在していたことを述べ、そのさまざまな型態について、その機能化と寄生化の方向と段階について論じた。そして、近世にさかのぼるとき農奴制経営は工業にも存在していたであろうこと、絹業においてはその農奴制工業経営が農奴制林業畜産業経営と同一の母胎をもつものであろうことを予想した。(綿業においては農奴制工業経営は農奴制林業水産業経営と同一の母胎をもつものであろう)

この予想に立つて、農奴制経営の基盤となるはずの土地の領有と支配について検討をおこない、その中で近世領主が、その封上(領地)を一円支配のもとにおいていたのではなかったであろうこと、また、その支配がすべての土地に対して一様ではなかったであろうことの論証を試みた。そして領主による支配が

1) 奥山好男：山村における在地所有と土地利用をめぐる二・三の問題——山梨県小菅村を例として——
経済地理学年報, Vol. P, pp. 39-54, 1964

2) 奥山好男：林野支配と農奴制経営——工業における農奴制経営と林業・畜産業におけるそれとの交絡——, 地理学評論, Vol. 3 P, No. 5, pp. 289-310, 1966

かならずしも貫徹されなかつた土地が存在したことを見だし、それが工業原料の基地となり、またそれとともに工業経営の基盤——工業労働をおこなう農奴に対する人格支配の基礎——ともなつたと考えたのである。

本論は、これらの論点と展望をふまえて、さらにこの種の考察をふかめ、農奴制工業がやがては資本制工業に発展するものとなるであろうことを論じようとしている。

ところで、工場制工業は一般に賃労働にもとづくところの資本制工業のことであるとされてきた。しかし筆者は、これら一連の作業を通して、そのほかに賦役労働にその基礎をおくところの工場制工業、すなわち農奴制工業とよばれるべきものがあると考えに至つた。そしてこの問題の検討が、本論をつらぬく主題となる。

筆者は、これら一連の発表ではひとまず「手工業」ということばを用いない。それはさしあたり問題となるのは生産関係であつて、道具によるか機械によるかという技術問題ではないからである。しかし、この道具が機械かという問題を単なる技術問題であるとしりぞけてしまうつもりはない。なぜならば、土地に代わつて機械が主要な生産手段になることが、農奴経営から資本制経営をわかつ決定的な契機となるからである。

賦役労働が、いつ、どうして、どのようにして、賃労働に発展するのかという問題は、筆者が常づね深い関心を寄せ、本論の主要課題のひとつとも考えている問題である。それはまた、封建制社会が、いつ、どうして、どのようにして、資本制社会に発展するのか、交換手段・支払手段が、生活手段・生産手段が、いつ、どうして、どのようにして、資本に転化するのかという問題とも密接なかわりあいをもつ。そしてこれは、共同体社会の十分な究明なくしては、解決されない問題である。

このためには、経済学・歴史学のみならず、現存する社会とりわけ村落社会の比較研究（比較経済論・比較社会論・比較文化論）のようなすぐれた人文地理学的な研究が有力な武器となる。また、民俗学・民族学・考古学などもすぐれた武器となろう。そしてこれらの武器を有効に使うためには第四紀（地質・地形・気候）学の援助を必要とするであろう。

II. 郡内織の生産構造

甲州郡内領 19 カ村惣百姓の名で江戸町奉行所に提起された「延宝越訴」——この「越訴状」が、最近の論文³⁾の主要な資料となつたものであが、この延宝 9 年 (1681)——に先立つこと 16 年、寛文検地の 4 年前、すなわち寛文 5 年 (1665) の記録⁴⁾に、

「花咲村の三右門と申す者之絹、浅利村甚兵衛江戸へ持参、云じか⁵⁾」

とあつて、かれ甚兵衛は、同年 4 月 17 日、代金 20 両を為替で受けとつている⁶⁾。

3) 奥山好男：林野支配と農奴制経営——工業における農奴制経営と林業・畜産業におけるそれとの交絡——、地理学評論、Vol. 3 p. No. 5, pp. 289-310, 1966

4) 秋元家甲州郡内治績考（以下、治績考と略称）中「万覚帳」寛文 5 年の記事。

飯田文弥・菅沼英雄・手塚寿男・羽田富士男ほか（山梨県立谷村高校社会部）：郡内機業発達史（以下、発達史と略称）、p. 106, p. 108, 1956, 都留（谷村）

5) 甲州街道大月宿は、桂川と笹子川の合流点、富士吉田道と甲州街道の分岐点にある。花咲村は、この大月宿（現山梨県大月市）西方、笹子川（甲州街道）ぞいの村。「延宝越訴」関係 19 カ村のひとつで、当時は村高 365 石、百姓 155（戸）である——飯田文弥ほか（谷村高校社会）：部郡内百姓一撮、p. 6, 1956, 都留。浅利はこの北方の村であるが「越訴」には関係していない。

6) 同じ記録に、

4 月 17 日	浅利村	甚兵衛	20 両
同 18 日	猿橋村	与左衛門	30 両
同 同	中津森村	半右衛門	30 両

第1図 17~19世紀における絹織物集散地と製品・原料輸送路

Centre de la production de soierie

et

Route des produit et textile du 17^e au 19^e siècle.

甚兵衛の持参した絹がどのような品でいくらくらいであつたか、この記録からだけではわからない。しかしのちに述べるように、価格はおよそ絹1疋あたり金2分くらいではなかつたのかと思われる。とすれば、その数量は40～50疋、重量は8～10貫目くらいであつたであろう。(人足ひとり5貫目とされているから、甚兵衛は供の者ひとりをつれての道中をしたことになる)

ここで、筆者は、この数行の記事から、三右衛門が農奴制経営もしくは家父長制経営をおこなつていたのではないかと推論する。そしてこの推論が成立するためには、それ以外に考えられるいろいろな場合を吟味し、その結果、それぞれの可能性が否定されることを明らかにしなければならない。

次にこの記述に関連して考えられるいくつかの場合をあげてみよう。

- ① 三右衛門が、その家族を動員して、生産を指揮した。この場合、家内経営である。
- ② 三右衛門が、原料を支給して、ほかの家庭に生産を委託した。この場合、問屋制経営である。
- ③ 三右衛門が、他の家庭の家族を動員して、生産を指揮した。三右衛門が工場を経営していた。(上記の推論)
- ④ 三右衛門が、地代として米のかわりに絹をあつめた。三右衛門は地主である。
- ⑤ 三右衛門が、ほかの家庭で生産されたものを買いあつめた。三右衛門は商人である。

まず①の場合をとりあげてみよう。ところで、当時、1疋の絹を織るのには、第IV節でくわしくのべるように、約20日の労働を要した(延20日という意味——以下・同様)。そのほかに、製糸の労働(すくなくとも経糸はあらかじめ用意しておかなくてはならない)、整経その他の労働、場合によつては染色の労働も必要となるから、どうしても製品としての絹1疋を作り出すためには30日あまりをみこまなくてはならなくなる。

とすると40～50疋の絹をつくるには、延1,200～1,500日くらいの労働を要することになる。この製糸から織布にいたる労働は、「耕作の外、女は蚕絹稼仕候」とか「耕作の間、女は蚕飼絹稼仕候」などであるように、主として女性の労働とされていた。だから、この1,200～1,500日の労働だけにとしたら、年300日の操業として4～5人、実際には6～7人の成年女子を家族のなかに抱えていなくてはならない。この4～5人あるいは6～7人の女性が専門に織つているとすれば、このほかに家事労働を担当する女性がいなくてはならなくなる。

こう考えてくると、この場合の三右衛門家には、男女・老幼とりまぜて20～30人の家族がいたことになってしまう。いわば単系家庭が数家庭分あつまつて一家をなしていたことになる。とすると、これは⑤の場合と同じことになる。これでは、先の推論とおなじことになってしまうので、ここでは一応はぶかざるをえない。

つぎには②の場合のように、糸あるいは繭を支給して、生産を委託したとするなら、ここに問屋にとつてやつかいなことがおこる。つまで、原料の目減り・目切れ(減・損耗)と原料の引抜き・横流し(流・転用)の相違を見きわめることはかなり困難なのである。とくに当時のように品質がまちまちで規格が統一されていなかった時代には、不正の規正は不可能であつたといつてよい。一定量の繭からどれだけの生

同 24日 朝日村 権太郎 42両

とあつて、いずれも絹の代金(仕切金)を領主・秋元氏の江戸屋敷に持参し、御納戸衆・田中重右衛門・有田四兵衛から為替手形を受け取り、郡内領谷村の役所に呈示して係役人・関口六郎右衛門・根岸弥五右衛門から現金の支払いをうけている。(治績考中「万覚帳」寛文5年の記事、発達史、p. 106)

領主自身、一個の金融機関(為替業者)として流通部門に登場しているわけであるが、領主が単なる金融機関にとどまるものでなかつたことを明らかにするのが、この小論のひとつの課題なのである。近世初頭における地頭・給人たちは、自己の支配下の農民たちの労働の所産を流通過程に投ずる商人としての性格を多分にもつていたのである。本来の商人の活動が活発になるつれて、かれらは後景にひきさがらるが、それでもなお米を中心とする農産商品の売手として近世を経過するのである。

糸が挽けるか、一定の糸からどれだけの屑糸がでるか、やってみなければわからなかつたのである⁷⁾。

ともあれ、こうして引き抜いておいた原料をもちいてつくられた製品を、ある種の商人に横流しをするおそれが生ずる。（このようなことをそそのかして買いあつめていたが、「夕鶴」伝説にでてくる商人である⁸⁾。）

もし三右衛門がこのような不正を防ごうとするなら、織機を厳重に管理し、みだりにつかえないようにする必要がでてくる。それでも織物は、もつと簡便な方法と道具で簡単に織ることが可能である。三右衛門の織機をもちいるときと、かれらの道具をもちいるときと、労働の生産性がかけはなれていたら事態は別である。しかし当時の技術水準では、そうしたことは考えられにくい。まして、製糸の不正は防ぎようがない⁹⁾。

三右衛門が、こうした不正を本当になくしてしまおうとすれば、つぎのようにするしかないであろう（それでも、不正は絶えないのであるが）。それは、かれらを一堂にあつめて、かれか、かれの代理の監督のもとで、かれらをはたらかせることである。これでは⑩の場合、すなわち推論の場合とおなじことになってしまう。

④の場合には、その織物が紬ではなくて生絹でなければならない。なぜならば、紬は多くの場合に柄物であるから、売れそうにもない柄の紬をもつてこられては、困るのは三右衛門の方であるからである。となれば三右衛門の方から柄の指定・注文をしなくてはならないことになる。先方が指定の柄をつくるにふさわしい原料をもつていれば好都合であるが、そうであるとはかぎらない。となれば、原料の支給、したがって③の場合に行きついてしまう。

では、絹の場合はどうか。なんの染柄のない生絹でも、実は、糸の挽き方、絹の織り方で、地質（ぢしつ）や風合（ふうあい）が変わってくるのであるが、ここではそれを問わないことにしよう。あとで述べるように絹1疋・米1俵とすれば、40～50疋を地代として受けとる三右衛門は高40～50石の百姓ということになる。ところが、当時の郡内領にはこれだけの高持百姓はなく、百姓といえればせいぜい10石どまり、それでも村内では豪農として通用していたと考えられるのである¹⁰⁾。

7) 前掲 2), 注 73)

8) 元来、武士と商人は、同一の存在であつて、ともに村落社会の異質分子である。そして、ともに武装集団であつて抽売り・抽買い（掠奪・強奪）をなりわいとする。図式的に言えば、他の武装集団からの「保護」という名の「労働」をもつて農民の労働・生産物と交換するものが武士であり、生産物（労働）をもつて生産物（労働）との＜交換＞をなすものが商人である。後者は「等価」＜交換＞、前者は＜不等価＞「交換」をもつて、それぞれの究極の姿とする。「伐取・強盗、武士のならい」とは前者のそれを指す。そうして、奇妙なことに、前者は高貴なるもの後者は卑賤なるものとなる。この高貴・卑賤のいまだ分明ならざる段階、すなわち中世～近世初葉においては、高貴なるもの（武士）が卑賤なるもの（商人）の役わりをもつていた。これが農奴制工業となつて姿をあらわしているのである。

この武士も商人も「合法的」な存在であるが、他方、「非合法」の存在もあるのであつて、前者にあたるものが海賊・野盗であり（かれらもまた商人であるが）、後者にあたるものが盗人・商人である。「夕鶴」伝説に出てくるのはこの最後の存在である。

9) 繭の重量の大部分は蛹のそれである。繭の重量とその繭にふくまれている糸の重量にはもと相関はない。これに相関関係を確立することが重要なしかし困難な課題であつたのである。繭の商品化はこれの解決をまつてなされたのである。商品化の順序は、絹・糸・繭の順であつて繭の商品化がもっともおくれたのである。（前掲 2）第Ⅲ節・注 73）

10) 表高は10右ていどでも、ここで推論するような経営（生産）をおこなつていたであろうから、実質の経済（所得）規模である裏高（在高）は2～3倍であつたとおもわれる。山村社会では、領主は完全には農業および農業以外の生産を掌握してないし、領主の支配のおよばない生産の場があつたからである。もつとも水田地帯の農村社会でも、領主は生産力をかならずしも掌握してはいなかつた。だからこそ、幕藩体制下に地主制の展開をみるのである。

しかしもしかりに三右衛門が40~50石の高持であつたとすると、かれは第Ⅲ節でのべる織主・絹師に相当する階級であることになり、またしても③の場合に行きつく可能性をはらんでくるのである。

とすれば、残るのは⑤の場合だけとなる。これは、しかしさらにふたつの場合にわけられる。ひとつはかれに隷属としてはいるが、絹・紬の生産は独立におこなっているものを相手とする場合であり他のひとつは、かれからまったく独立している自由な生産者を相手とする場合である。

前の場合、かれは気にいつた柄あるいは風合の品を受けとつて、その分だけ地代を差し引いてやることになるであろう。(これと同様なことを、領主は領民とのあいだでおこなっていたのであつて、これを継合という。やがて上納は現物から現金へと変わる。その時点ではもはや、柄も風合も問題にならなくなる。)かれの場合も、気にいつた品がなければ、地代をまるまる受けとつてしまうことになる。もしもかれがそのようにふるまっていたのであつたならば、かれは④の場合よりもはるかに大きな高持でなければならない。そうでなければ、気にいつた品だけで40疋を収めることはできないであろう。近世初期の大きな高持なら、それは名田持であることになり、「花咲村の三右衛門と申す者」などと記録されずに苗字をかぶせて記録されたであろう(第Ⅲ節参照)。

といつて、すべての隷属的な生産者にかれの気にいるような品をつくらせようとするれば、③の場合にいずれは行きついてしまう。

それならば、あとの場合はどであろうか――。

当時、本田畑をのぞく他の土地には領主の支配がおよんでいなかったと考えられるから、自由な独立した絹・紬の生産者は、そうした土地の利用についても自由・独立の存在であつたとの前提を立てることが許されるであろう。(第Ⅰ節参照)

実は、この年2月9日、郡内領古川渡村の猪兵衛は絹をもつて村を出て、4日かかりで12日に江戸大伝馬1丁目の絹問屋宇田河屋甚右衛門方に着いた。古川渡村は谷村(現都留市)に近い富士吉田道を前にした村で、当時、谷村から江戸へは途中八王子あたりで一泊する2日間の道中である。かれは、その倍の日数をついやしたことになる。かれは、さらに1カ月のあいだ宇田河屋方に滞在して絹を売りまわり、3日13日、宇田河屋から仕切金50両あまりを受け取つた。かれの絹は売掛になつていたのである。かれは問屋・宇田河屋の顧客である小売商人に卸売をしたものと考えられる。そうして、その帰途かれは甲州街道高井戸宿のあたりで追剥にあつた。これがきっかけで、

「向後は郡内商人江戸へ参り売り廻り候て、代金残らず御屋敷持参いたし納め置き、初其元にてカハセ(為替)に仕り請取り候様に急渡御領分郷中村々へ申しつけ、云じか」¹¹⁾

ということになり、こうした偶然から、三右衛門・猪兵衛のことと受け取つた金額(為替)が記録に残されることになつたのである。江戸売は、多大の日数と危険つまり経費を負担することなしには、おこなわれなかつたのである。

他方、郡内の林産物あるいは農産物を米・塩などの生活手段ないしは生産手段に換えるための中世以来の市場が、この江戸売に先行して存在していたのである。ここに買手としてあらわれる旅客は、かれ自身はまず消費者とのものである。かれにとつて輸送・流通は経費としては意味をもたない(売手にとつても売掛の危険はない)。この生産地市場の相場に消費者価格がさしあたり同調(鞆寄)する。この市場は、

「甲州みやげに 何もらふた

郡内しま絹 ほしぶどう」¹²⁾

11) 治績考中「万覚帳」寛文5年の記事、発達史、p. 105。

12) このうたがうたわれるようになったのは、江戸中期とされている。が、自然発生的に甲州でうたわれた里謡であつたか、意識的ないしは意図的に江戸のような消費地でひろめられた俗謡に起原をもつものであつたかは明らかではない。というのは、特産品あるいは新製品の宣伝に長唄・歌舞伎などが利用されていたからである。その典型が越後縮の普及・宣伝のために作詩・作曲されたといわれ

と、富士講・身延講の本格化する半世紀後にうたとなつてあらわれるのであるが、が、この寛文年間すでに一般旅客にまじつて、その登拜客の往還も増しはじめていたとおもわれる。花咲村は、その両路線の分岐点である甲州街道大月宿に近い街道ぞいの村である。この市場で仕入れた絹を三右衛門が甚兵衛に卸したのであるなら、甚兵衛門は猪兵衛のしたように輸送・販売するのであろうから、甚兵衛はともかく三右衛門にとって利得どころか損失を招くことになるのであろう。

もし、それを避けようとするならば、市場を統制し独占価格を独立した自由な生産者に強制するのではなければならない——事実、それは元禄年間に強行される。そうなれば、自由な独立した生産者は、——下々田畑～山畑・柴山などの本田畑以外の土地の利用についても自由・独立の存在であつたから——、その土地を織物の原料ではなくてみずからの食料の生産のために利用することになるのであろう。(第1表参照)

ところで、「延宝越訴状」別紙には、

—¹³⁾ 紬年貢として1端につき金1分・300文宛お取りなされ、米1斗9升5分御継合なされ候、此の米の儀は、9百文程に当り候御事

とあり、他方、「延宝越訴状の本文」には、

—¹⁴⁾ 納紬 116端 此代金 36両

右之替米 61俵余 此代金 20両1分余

とある。この訴状の数字をもちいて計算すると、金1分・銭1貫、.242文.857、米.195合(実は、米.185合)・銭.910～.920文となる¹⁵⁾。わかりやすい数字になおすと金1両・銭5貫文、米1石・金1両、そして紬1疋(2反)・米1俵(3.7斗)となる。この訴状は、

紬1反……米.195合¹⁶⁾→米.308合.6勺

綿1把……米.525合→米.161合.5勺強

麻1把：…米.054合→米.004合.5勺

と、継合すなわち現物文易における交換比率が変化している——領民側にとって悪化していると訴えているのである¹⁷⁾。ところが、すでに明らかなように、綿と麻の交換比率(対米比価)は低下しているが、紬のそれは逆に上昇している。

このことから、

「綿1把あるいは麻1把を生産する要に要する平均的必要労働が、依然として郡内では——換言すれば農民の経験ないしは農民の感覚では——、それぞれ米.525合あるいは米.054合のそれと等しいとしても；より労働生産性の高い地域からの移入・流通にともなつて、それらの生産に要する社会的平均的必要労働は——とくに麻のそれは——著しく低減したと考えられるのである。

いまや、郡内で生産し移出すべき繊維商品は、綿や麻ではなくして、絹や紬となつたのである¹⁸⁾と推論される。しかし、紬についての継合は、綿・麻についてのそれとはことなつて、現物交易そのも

る長唄「越後獅子」である。

このうたが江戸で流布されたか否かは明らかではないが、甲州の道中でこのうたを耳にしたとしたら購売意欲をそそられるという効果があつたかもしれない。そうだとすれば、これが甲州の里謡であつたとしても、なかば意図的に作られ流されたものであつたとも考えられる。

13) 延宝9年(1681)正月、秋元撰津守知行所甲州郡内領、19ヵ村惣百姓「乍恐以書付訴訟奉申上候、御奉行様(江戸町奉行所)」、別紙第6項。郡内百姓一揆(*op. cit.*), p. 24。

14) 延宝9年(1681)正月、秋元撰津守知行所甲州郡内領、19ヵ村惣百姓「乍恐以書付訴訟奉申上候、御奉行所様(江戸町奉行所)」、別紙第6項。郡内百姓一揆、本文第5条。*ibid.*, p. 22。

15) 前掲2)・注p. 3), p. 4), p. 16。

16) 米, 195合は実は米, 185合である。3.50合入りの米1俵を、370合入りの1俵と見なしているからである。*ibid.*, p. 4), p. 16。

第1表 江戸売の諸経費・利潤

——猪兵衛の場合（推定）

—— 紬1疋あたり正米換算——

（単位：斗）

収入之部	支出之部
市場価格 5.00	生産価格 3.70
	直接経費
	輸送費 —
	販売費 —
	小計 .20
	間接経費
	交際費 —
	保険料* —
	雑費 —
	雑費 —
	小計 .20
	利潤
	口銭 .10
	金利 .30
	運上 .05
	小計 .45
	計 4.55
	純利 .45
合計 5.00	合計 5.00

は米3合見当で、この比率は今日でもあてはまる。これら祝儀・謝礼等の諸雑費・諸負担を輸送・販売間接費とする。

- 3) 問屋への口銭は、口銭率2%として米にして1升。紬は主として秋冬物であるから、半年ほど商品をかさねどならない。小売商人には売掛となる。月利1%として、米にして紬1疋につき3升。この口銭金利の差引（見込）をした残が仕切金である。
- 4) 猪兵衛——もしくは、猪兵衛に商品を委託したもの——が、自由な独立した生産者すなわち坪方から収集（坪買）したのであるならば、その商品は紬であると考えられる。季節柄、生繭の端境季と考えられるから、すくなくとも生絹ではないとおもわれる。
- 5) この場合、4~5升が猪兵衛——もしくは、猪兵衛に商品を委託したもの——の純利となる。したがって、かれは4斗1~2升見当まで買進できることになる。——利幅は無論せまくはなるが。当然、坪方は旅客のほかにあたらな顧客を市場に見いだせるわけで、他方、旅客は4斗1~2升をこえて江戸小売価格の水準である6斗1~2升見当まで買い進めるのである。猪兵衛——もしくは、かれの委託人——にとつての買いの天井は、坪方にとつての売りの底値ということになる。したがって、生産地市場で仕入れて江戸売するためには市場を規制して統制価格を強制しなくてはならなくなる。（注23）

1) 紬1疋の卸売価格を金2分（米5斗）とすると猪兵衛の受取った仕切金50両あまりという値から、猪兵衛の貨物は紬100~120疋、重量にして40~50貫と推定される。輸送の所要日数は4日である。輸送に20人手間、販売には30人手間、あわせて50人手間、これに猪兵衛の食費・宿泊費すなわち旅費・滞在費を加算して合計70人手間、米にしに紬1疋あたり2升、これが輸送・販売直接費である。

2) 領内からの出口にある口留番所（関所）を通してのための運上は、紬につき銀3.5分、米にして約半升。これを領内通行の安全確保（給思）に対する反対給付（報恩）であるとすれば、領外通行の安全を得るための在々宿々の役人ならびに領内外の蔭の実力者への祝儀・菓子料に米にして1升を見こむものとしよう。これは、いわば損害保険料でもある。

かれ猪兵衛は、宇田河屋方に宿泊して手代の手引で売りまわつたのであろう。手代への謝礼・買方への菓子料、卸売の仲間への祝儀、仲間中への負金、あるいは問屋を通じての町役人・町役人中への祝儀・菓子料ないし諸役銭、これら三者それぞれに盛り（掛け）蕎麦1枚（1杯）相当の出費を紬1疋について見つもとすれば、あわせて米1升——盛り（掛け）蕎麦1枚（1杯）

17) *ibid.*, p. 16.18) *ibid.*, p. 17.

のであつたのではない。それは、「訴状」別紙の記述に示されているように、紬1反につき金1分・300文の割で現金を上納し、その見返りとして米・195合(実は、米・185合)を下給される現金対現物交易に変化していたのである。

これに似たことが、近世初葉、上州桐生領においてもおこなわれていた。桐生領は毎年、中絹2,000疋、下絹410疋を幕府に引き渡し、その見返りとして中絹1疋につき銭・215文、下絹1疋につき銭・165文を受け取っていた——実際には、これに見合う銭額を年貢永(銭)から差し引かれていたのであるが、ここでは、郡内領とは逆に現物対現金交易となつている。桐生領では年貢が永納(現金納)であつたから上納絹に対する受け取りが現金だつたのであり、郡内領では年貢が米建(現物建)¹⁹⁾であつたから、紬年貢に対する給付が米建(現物建)だつたのであろう。そして、紬年貢そのものも、綿・麻が「越訴」当時そうであつたように、現物すなわち紬そのものでなされ、それに対する給付も現物建すなわち米建でなされる文字どおりの現物交易がおこなわれていたものと考えられる。それが、桐生領で正保3年(1646)から上納絹が現金化したのと同様に、現金納となり「越訴」時代にいたつたものと考えられる。

ともかく、「9百文程に当る」「米1斗9升5合」を、金1分・300文すなわち銭1貫・542文・857の上納に対して下給されるわけである。ここで、6百文ほどが収奪(搾取)されるのである。したがって、

「かりに、郡内領では紬1反を生産するに要する平均必要労働と米・195合を生産するに要するそれとが等しいとしても、駿豆相3州をも含める経済圏を想定したとき、今や郡内領では、社会的平均的必要労働の面で紬1反と米・309合とが等価となつたのである」²⁰⁾

としても、その結果はまず領主の手に帰したのである。

さて、桐生領の場合、上納絹を現金化するにあたって江戸相場を基準にして価格を裁定したことは「桐生領より先年絹被召上候覺」²¹⁾によつて知ることができる。この場合、あらたに売上出目(premium)を積み重ねて上納することになつたのである。が、この売上出目は、平価の切下げにともなう価格の上昇の反映であるだけでなく、相場の変動についての考慮を織りこんだものであると考えられる。すなわち、かりに現物の相場が上がつたとしても、なおかつ現金による受け取りが不利にならないよう価格を裁定しなおして、もとの裁定価格との差を売上出目として別途に受け取ることにしたと推定されるのである。

同様の配慮が郡内領の場合にもなされたとすると、相場変動の値幅を2~3割方として、紬1反・金1分300文(銭1貫・543文)という裁定価格に対する基準価格は紬1反・金2分、米にして半石がらみと踏むことができる——江戸御売相場は、これを基準にして上下に変動していたものと推量される(領主は現物交易によつて現実に手にした絹・紬を江戸で換金していたのであろうが、その場合、直接に消費者に対して小売していたとは考えられない²²⁾)。

19) 「延宝越訴状」第11条に「甲州一国は古より今に至る迄納め方の儀は小切と申候て御年貢3分の1は石代金1両につき米11俵1斗宛の直段切定納仕申候……然る処当御地頭様は国並の小切を御破り右代高直に数年御取詰相成候」とある。年貢の $\frac{1}{3}$ は、米11俵1斗(米4石・08升)の「安石代」で現金納、残りの $\frac{2}{3}$ のさらに $\frac{1}{3}$ すなわち $\frac{2}{9}$ は国中(甲州盆地)相場を基準とする張紙値段をもつて同じく現金納、そして $\frac{2}{3}$ の残りの $\frac{2}{9}$ すなわち $\frac{4}{9}$ は最初は靱納のちに正米納さらには蔵前相場による現金納となつていた。これが武田の遺法と称せられる大・小切仕法である。

この最後の $\frac{4}{9}$ が現金納から現物納へと再転するのは、寛政元年(1789)の「万石以上囲米之制」が布令された際である。すなわち、この寛政の改革まで、郡内をはじめ甲州一円では、現物建・現金納だつたのである。

20) 前掲2), p. 17。

21) 群馬県大間々町、草木家文書。また、年不詳(元禄・前後)10月9日桐生領山地村安藏藤右衛門差出・「彦部弥三郎」(信昌)名宛、彦部家文書にも、江戸相場を基準として価格を裁定した旨が述べられてある。

22) 上納あるいは献上<第Ⅲ節・参照>された絹・紬を、領主は江戸邸で出入り商人に下賜あるいは払下げる形式をふんで卸売をしたものと考えられる。出入り商人が問屋であつたか小売商人であつた

かりに、生産地市場の相場とこの江戸御売相場と逆鞘であつたとしても、領主がしたと同様に紬1反を米1俵(3.7斗)がらみで——紬1反を米.195合(実は、米.185合)ていどで——手にすることができれば、江戸売は十分に成立しうると考えられる。しかし、それには在々宿々で立つ市場から疎外された存在がなくてはならない。みずからの生産した絹・紬をみずから市場に出すのではない生産者——かりに生産従事者とでも名づけておくほかないところの存在——、生活手段そのものか生活手段の下給に対して絹・紬の生産労働そのものを上納するような存在、それが当時の江戸売の前提であつたと考えられる。

領主が、

紬1反……米.195合→米.308合.6勺

という差額すなわち剰余労働を売上出目として収奪(搾取)したのは、ここでは紬年貢として継合の場に出された分についてだけであるが、江戸売として継合の場に出されなかつた分については、その売上出目は江戸売に出したものの手に——ここでは三右衛門の手に——帰すことになるであろう。甚兵衛は、いわば、この三右衛門の手代ともいべき役割をになうものであつて、この甚兵衛の手当あるいは輸送・販売の諸経費は——領主の場合とおそらく同様に——この売上出目から支払われることになったであろう。

(そして、こうした生産体制の上に成立していた江戸売は、やがて姿を消すことになる。流通は、生産地市場を中心として展開されることになり、元禄以降あらたな局面をかえることになるのである²³⁾)

かは判断すべくもないが、消費地口銭のうち問屋口銭はわずかで大部分は小売口銭であつて、両者あわせて2〜3割方であつたろうから、紬1反・金1分.300文、米にして6斗1〜2升というのは江小売の基準価格にも相当することになるであろう。

- 23) 三右衛門あるいは猪兵衛——おそらくは、この猪兵衛に絹・紬を委託したもの——は、生産地市場の相場が4斗1〜2升の水準をこえるなら売りに、この水準を割るなら買いに出ることになるであろう。しかし、まとまった荷を市場に出すかれらが売出動したとすれば、相場が大きく崩れるおそれが生ずる。したがって、生産地市場の相場はこの水準を底値とすることになるであろう——かれらは、みずからの利益のために結果において、生産地市場の相場を売崩すのではなくむしろ買い支えることになる。かれらの存在が、生産地にふたつの生産価格を生むことになる——ひとつは市場に売手としてあらわれる自由な生産者の生産価格であり、ひとつは生産従事者によるところの生産価格である。

このふたつの異なつた生産価格は、ことなつたふたつの生産体制のそれぞれに対応する。そしてそれぞれがそれぞれの流過程をもつ。ひとつは国売であり、ひとつは江戸売である。しかし、江戸売が姿を消していくのにともなつて国売は発展するはずであるが、その生産地市場は自由な市場として順調に成長していったわけではない。(奥山好男：近世における甲州郡内領と上州桐生領の織物の流通構造，経済地理学年報，Vol. 12, No. 2, 1966)

無論、この自由な独立した生産者に対応する相場が4斗1〜2升を底値とするのは、江戸卸売相場の基準価格5斗に対してである。もし三右衛門らが、市場を統制し独占価格を強制するなら——経済外的に強制するなら、江戸卸売相場の変動の値幅を2〜3割方として、領主がしたと同様に——この場合その下値の際に——損失を招かないように独占価格を裁定するなら、それは3斗6〜7升を天井とすることになるであろう。そうなれば、先の

「かりに、郡内領では紬1反を生産するに要する平均的必要労働と米.195合を生産するに要するそれとが等しいとしても、駿豆相3州をも含める経済圏を想定したとき、今や郡内領では、社会的平均的必要労働の面で紬1反と米.309合とが等価となつたのである」

というような交換の利が、かれら自由な独立した生産者から失われることになる——かれらは自給の生活に利を見いだすであろう。栽桑・養蚕あるいは製糸・織布は、総体としておとろえることになる——これを防止するためには、またしても経済外的強制によらなくてはならなくなる。(第V節参照)

かくして、生産体制は自由ならざる隷属した生産従事者によるそれへと一時的にせよ一本化し、価格ないしは相場は一本化するであろう。他方、市場が自由に発展していくなら、生産従事者の独立もすすみ、ここでも体制と相場の一本化がみられることになるであろう。事態が経済的に進行するかぎり、とどのつまり相場は一本になるのである。

III. 織主と絹師——農収制経営の *Hierarchy*——

郡内織の生産構造はさらに複雑である。花咲村の三右門が隣村・浅利村の甚兵衛に絹の江戸売を委託した寛文5年(1665)から四半世紀ちかくのち、貞享5年(1688)4月5日の記録²⁴⁾に、

「機道具新規に仕り、常は御勘定所に差し置き、織候節あい渡し、服忌そのほか穢は敷きこれなく上々吟味仕り、織らせ申すべき由、申し遣し候。酒井権左衛門、承り、当月3日に仰せ遣され候」

とあつて、御勘定所常置の藩有織機を貸し出し、絹を織らせていることがうかがわれる²⁵⁾。

労働対象(原料)については明らかではないが、労働手段(織機)は明らかに領主のものである。織機の貸出しという〈給恩〉に対して、それへの〈報恩〉の意をもつて、織物を「織らせ申べ」となるのであろうか。それは、ともあれ、

辰の卯月(4月) 献上の生絹織主覚²⁶⁾

拾貳尺 星野宇右衛門

拾壹尺 市川仁右衛門

拾壹尺 中町仁右衛門

拾壹尺 下町太兵衛

とあつて、4月3日に「仰せ遣され」てからわずか1カ月たらずのあいだに、これだけの絹を献上するにいたっている。当時の生産能力からみて、かの花咲村三右衛門と同様に、かれらは家内労働力のみで生産したとは考えられない。(第Ⅱ節参照)

また、「覚」の中にある「星野」・「市川」は、同じ「覚」の中の「中町」・「上町」という地名を表するものとことなつて、姓(氏)をあらわすものと考えられる。これが家士の記した「覚」の中にあることは、それが公文書ではないにしても注目されてよい。ちなみに、花咲村三右衛門のことを記しているもの、これと同じ記録物なのである²⁷⁾。

なるほど、百姓(町人)身分のものの中にも、姓を名のるものもあるにはある。けれども、公式にはそうしないのがふつうであろう。「献上」品の付箋に記しあつたのを、そのまま書き写したのであろうか。(「献上」書に姓を名のるとすれば、ただものではない。)または、名のみ記されていたのに、記録するにあつて姓を冠せたのか。とすれば、家士のあいだにも姓名を知られるほどの人物(身分)であつたことになる。いずれにしても、星野・市川らは、「花咲村の三右衛門と申す者」などよりは、身分のある存在であつたのではなからうか。(第Ⅱ節参照)

そして、「服忌そのほか穢は敷きこれなく上々吟味仕り、織らせ申すべ」く「申し遣され」たのは、酒井権左衛門ではなく、実際には星野・市川ら「織主」であろう。かれ権左衛門が「承」つたのは織機の庫出し・貸出の率領・差配であつたと考えられる。権左衛門は、星野家・市川家などについては家内のようすをよく心えており、「服忌」中であるか否かを当然に「吟味」した上で織機の貸付けをおこなつたであろう。が宇右衛門・仁右衛門らは直接の生産従事者(織子)ではないはずである。女性であるはずの織子の「穢は敷き」を「上々吟味」したのは、「織主」の妻女かその代理ではなかつたのではないだろうか。

織子が「織主」の直系家族だけではなかつたであろうことはすでに述べた。この点、第Ⅱ節の三右衛門家の場合と同様である。とすれば、かれらは、いかなる階級・階層に属するものであつたであろうか。傍

24) 治績考中「万覚帳」貞享5年(4月5日)の記事より。発達史, p. 96。

25) 幕末段階での藩営マニュファクチュアとことなることはしだいにあきらかになるであろう。ここに、この小論の趣旨がある。なお、郡内領支配地頭・秋元氏は城主・藩主といえるほどの地位にはなかつたが、ほかに適当なことばがないので「藩有」としておいた。

26) 治績考中「万覚帳」貞享5年の記事より。発達史, p. 96。

27) とともに「万覚帳」の記事による。前掲4)。

系家族についてであればともかく、他の家庭の家族のひとりびとりにいたるまでその私事を「吟味」し、選びとつて特定の労働に従事させる権能をもつものは、農奴主か奴隷主か、そのどちらかの性格をもつたものではないかと考えられる。

近代工場主が、かれの女性労働者の私事を知ることはあつても、それは事後においてであつて事前においてではない。かれには、まして労働者の家族の私事を「吟味」する権力もないしまた必要もない。労働者はかれの隷属物ではないし、その家族はかれの支配下にあるではない——。

工場主は、その労働者の家族について、その労働者の私事について無関心である。工場主は、かれ労働者の家族、かれ労働者の年齢のいかんによらずして、かれ労働者の商品のいかんによつて支払いをなす。そして、この支払いは、かれ労働者の商品たる労働力の再生産のための社会的平均的な費用価格をつぐなうの でなければならない。かれの労働者が扶養すべき家族をかかえているか否かは、かれの商品たる労働力になんらの価値を加えるものでもなく、かれの商品からなんらの価値を減ずるものでもない。また支払いは、かれの年齢に対して、いわんやかれの性別に関してなされるのではない。一物・一価の原則、すなわち同一商品・同一労働（能力）・同一賃金の原則がとらぬかされるのでなければならない。

それゆえ、この国——ならびに、ナチス・ドイツ——において、政治・経済の危機に際して再編・復活された家族手当制・年功序列制は、住宅貸与制とともに、中世農奴制の遺制(再版)であるとさえいえる。これをもつて資本の恩恵であると受けとるところに、この国は前近代的性格があらわれてすることができる。

このこと——資本制的生産関係の中に農奴制的生産関係がしのびこんでいることから逆に——、農奴制的生産関係の中に資本制的生産関係がしのび寄っていないか、という疑問が生ずる。生産従事者が、「織主」のもとで労働したと同じ時間を、かれの家族とともにみずからのために労働したとすると、かれのうべかりし生活手段（の一定量）をもつて、「織主」がかれ生産従事者の「織主」のための労働に對置することありえないことではないであろう。

としても、

「地主たる工場主は、隷属たる生産従事者から、すでにそれ以前に現物地代（剰余価値）を収奪していたのである。領主との現物交換である「継合」とその点、まったく変るところがない」²⁸⁾

「織主」が農奴主もしくは農奴主のような存在であるとするなら、領主がなにゆえにそのような「織主」に織機を貸しつけなくてはならないのであろうか。領主である秋元氏²⁹⁾は当時の先進地域・上州からすすんだ技術を導入したのであつた。が、そのすすんだ織機は高価であつたために領主がみずから購入してか

28) 前掲 2), p. 15.

29) 秋元氏は藤姓を称し、嘉禄年中(1225~6) 総州秋元庄にちなんで氏とした。天文 10 年(1541)、上州深谷(武州深谷)に移り、上杉氏憲の部将として豊臣氏の北条氏攻撃に際し直ちに降伏、翌・天正 19 年(1591) 徳川氏に隨身して武州中谷に 4 千石を給せられた。慶長 5 年(1600) 関ヶ原合戦の際、軍使として会津にいたり上杉景勝を招降し、翌 6 年その功により上州 総社 6 千石を加給され、上州新田領のうち 4 千石とあわせ 1 万石。大名に列す。

寛永 10 年(1633)、8 千石の加増をえて甲州郡内領に転封。延宝 5 年(1677)、当主・喬知は 30 歳にして奏者番に昇進、さらに天和元年(1681)には若年寄兼寺社奉行。元禄 12 年、本庄宗資の卒するにおよび野州足利領 2 万石を襲ぎ、この間 3 回(4 回)にわたる野州・河州などでの加給分をあわせて 5 万石、老中に榮進。喬知、宝永元年暮、武州川越領 5 万石に転封されて城持大名。郡内領、天領となる。

明和 4 年(1767)、前橋藩主・松平氏たびかさなる水災に移転を願うにより、秋元氏は羽州山形に転封。武州川越領は上州前橋領とともに松平藩(前橋・川越藩)領となる。下つて弘化 2 年(1845) 上州館林領 6 万石に転封、ここで維新をむかえる。秋元氏の足跡すべてこれ機業地である。維新・廃城とともに、本丸跡に綿紡工場を經營して綿業地・館林領に君臨しつづけようと図る——現在、日本絹機株式会社館林工場。

第2図 近世における郡内領 生産(支配)構造……Hierarchy

第3図 農奴(隷農)制工業における生産関係(剰余価値は利潤ではなく地代として……)

れらに貸しつけたのである³⁰⁾とも考えられる。しかし、その上州式織機がどんなもの、あつたかわからないが³¹⁾、高だか米1~2石でいどの価格のものではなからうか³²⁾。とすれば、かれら「織主」の手のとどきかねるものでもなかったであろう。

30) 発達史, 前掲 1)。第2節 史料から見た郡内機業の起源, pp. 88~100。

31) この織機がいかなるものか明らかではない。しかし低機(ひくはた, 居坐機(イザリバタ)ともいう)なら全国どこにでもあつたはずである。あえて、導入するまでもあるまいと考えられる。低機でなければ、高機(たかはた)でなくてはならなくなる。なぜなら、低機と高機の間機種というのは考えられないからである。低機と高機の相違は、単に、腰をおろすか脚をかけるかにあるにすぎない。

高機は、低機と同様に、足で開口し緯入・緯打は手でおこなう。ただ、開口方式は、低機では弓棚仕掛のみであるが、高機ではほかに唐碓仕掛・轆轤仕掛の3種がある。高機での開口は、仕掛に結びつけられている踏木(pedal)を踏むことによつてなされる。弓棚・唐碓仕掛に2本(3本)以上の踏木をもちいることによつて、綾織とか縹子織とかが容易におこなえるようになる。ジャカード仕掛・ドビー仕掛は高機でもちいられる開口装置である。ともに、踏木を踏むことによつてナイフ箱がまきあがり、あらかじめセットしておいたとおりの経糸・綜統(したがつて経糸)がひきあげられて開口する。この仕掛をもちいるときは、開口にもちいる踏木は1本でよい。

開口と緯打とを、それぞれ別の踏木でおこなうのを厩機(うまやばた)といい、江戸中期以降もちいられるようになった。明治にはいつて、ジャカード・ドビーとともにボタンが紹介され、高機にボタンを装置したものを半機(はんばた)、厩機にボタンを装着していつさいの運動を踏木を通じて足でおこなうものを足踏機という。この踏木を偏心板をして作動せしめ、この偏心板をなんらかの動力で回転せしむるものを力織機という。

とすれば、織機の貸付けは別の意味をもつことになる。おもうに、領主の権威はその領主から織機を貸し付けられた「織主」の権威につながる。いわば織主職³³⁾の象徴が「機具」であつたのであると考えるなら絹「献上」は、織機の貸付けそのものに対するのではなくて、「機具」に象徴される権威の貸与(供与)に対する<報恩>ということになる。

織主は、領主から「織候節」になると数台あるいは十数台の織機を借りうけ(星野・市川らは、かれらの「献上」絹の数量からみて、少なくとも11~12台の織機を借りうけていたと推定される(第IV節・参照)、そして、養蚕道具をなりかたづけた蚕室(作業場)などにならべ、これに見あう織子や挽子(糸挽女)をあつめて、その労働を組織・指揮したのではないだろうか。織主が、領主の織機を他人にまた貸したとは老えにくい。領主の織機であるから、その保守・管理に不行き届きがあつてはならないはずであるから。

紬「年貢」は、「献上」絹とその起源においてことなる。いわば、第II節で考察した④の場合にあたるのであるが、しかし地代そのものであるのではない。絹のつくられる土地すなわち<桑>とはことなるところの土地(本田畑)から収奪された(収奪されるはずの)年貢<米>と、紬は交換されて領主の手に帰るのである。これは、領主と領民との間の現物<交換>である。織主と織子(挽子)との間でおこなわれる(と考えられる)現物を媒介する労働「交換」がすでに不等価「交換」であるのと同様に³⁴⁾、領主と領

ちなみに、バツタン(batten)とは箆框のことで、ここを杼(shuttle)を走ら(飛ば)せるような装置をわが国ではバツタンという。手でこの装置をして緯入させるのが先の半機などでみられるものであり、足で開口する(ジャカード・ドビー仕掛を作動せしむる)と同時に、このバツタンを動揺せしむる織機を足踏機という(無論、緯打は一方の踏木でおこなう)。

- 32) 幕末、両毛(上州・野州)地方で、機足(織機)貸借にともなう機足損料は金1分、という記録がある。ただし高機であるということしかわからない。これからこの機足の値を逆に推算すると、金2両ないし金2両2分となる。当時の米価はわからないが、両に半石でいどであろう。また、明治3年の記録では、広機足1挺・金6両、当年の米価は両に3斗であつた。今日でも、機足1台・米1~2石である。正米を貨幣商品として価格を表示すると、時代の差をこえるものがあるようである。
- 33) 「織主」の「主」は、持主・貸主・借主あるいは地主・家主などの「主」と同様に、行為あるいは所有の主体という意味であろう。ここでは、「織主」は献上絹の生産者あるいは献上絹の所有者(元所有者)つまり献上主のことであろう。

しかし、領主から織機の貸与をうけて、それにともなう権威を付与されたという点を重視して、これを職(しき)のひとつに見たてたのである。実際には、郡内領において「織主職」なるものが近世にあつたとする史料はないのである。以後、このような封建的権威を背景とするような織物生産者を、あらためて織主と称する。(括弧をはずして用語としてもちいる。)

- 34) 賦役労働は、本来、共同体社会に起源をもつ。そもそも、共同体は<社>を中心とするところの集団であつて、それ自身をも<社(communitiy)>と称する。この<社地(common)>における生産物を<租>といい、<社地>における労働を<役>という。それが、今日みられる<結、ゆい>である。<社地>以外の生産の場における生産物(労働)をもつて、<租>・<役>にあてしむるとき、それを<調>・<庸>という。<役>が集合的協業であるのに対して<庸>は分散的協業であり、ともに<社中(commune)>の<労働>交換を意味する。

しかし、<調>・<庸>の出現は、<社地>の縮小・<私地>の拡大であり、<社中>の階層・階級分解を示す。ここに<役>なる労働に対する<庸>なる労働力をもつてする「交換」の形態があらわれることの素地が生れる。かかる「交換」による剰余価値の収納が<収奪>であり、かかる<収奪>の対象となる労働は賦役労働である。<社中>は、<社>があるが故に<社中>に、<社中>があるが故に<社>に繫縛される。<労働>対<労働>の<交換>が「労働」対「商品」の「交換」へと発展したのであるなら、それは、労働力なる<商品>対<商品>たる貨幣の<交換>の萌芽であるとなしう。こうした発展が、<社中>の階層・階級分解のあらたな局面をもたらし、<社>の変質・<社中>の解体をもたらしたとき、「交換」は<交換>となる。かかる<交換>による剰余価値の収納を<搾取>といい、<搾取>の対象となるところの労働を賃労働という。

——すなわち、これが、共同体社会から資本制社会にいたる経緯について筆者の(目下のところ

民の間でおこなわれる現物＜交換＞も、やがて不等価＜交換＞となる——年貢と運上となっていく³⁵⁾。

しかし、＜交換＞でありかぎり、これは第Ⅱ節の⑤の場合に相当する。他方、織主経営は③の場合に相当するのであることはいうまでもない。

領主・秋元氏は地主であるというより商人であつたのであるが、かれはここにとどまるものではなかつた。おなじ貞享5年(1688)の記録³⁶⁾に、

辰7月朔日

己に献上之生絹島

谷村へ申し遣し候出来参候御本

一、島絹	上 町 伝 右 衛 門
一、同	中 町 七 兵 衛
一、同	上 町 久 三 郎
一、同	上 町 市 郎 兵 衛

とあつて、島(縞³⁷⁾)の見本をとりよせている。生絹とことなつて、島絹(島)は柄物(先染物³⁸⁾)であるから、それで柄見本(見本織)をとりよせていたのであろう。したがつて、ここには数量は記載されていない(その必要がないのであるから)³⁹⁾。この行動が、領主の消費者としての関心から発生したのか、生産者としての配慮によつたものであるかが、そのいかんによつて領主と織主との関係もことなつてくる。

総じて、縞・紵のたぐいは染色が堅牢であせにくいことから内着(home-wear)・街着(town-wear)・遊び着(country-wear)などの不断着(casual wear)として、綿であれ絹であれ庶民(百姓・町人)の衣料となつていたのであつた武家の式服は麻(上布⁴⁰⁾)であつて、小袖あるいは平服は絹であるが、いずれ

の)素描である。なお、つけくわえていうなら——。継合は、いわば＜調＞の中世的な姿である。そして、古代国家を＜公＞とすれば、継合は＜私＞的な＜調＞といえるのではなからうか。とすれば、＜私＞的な＜役＞あるいは＜庸＞は、どういう姿で、中世あるいは近世に存在していたのか。封建支配の重疊的性格を考えると、各級の支配者のもとで、＜私＞的な＜租＞・＜調＞・＜役＞・＜庸＞は、いかなる形で存在していたのか。こうした疑問も生じてくる。

35) 前掲 2)。第Ⅴ節, p. 16。

36) 治績考中「万覚帳」貞享5年の記事より。発達史, k. 96。

37) 織物の柄(模様, 文様)の一種で、いわばもつとも簡単なもの、すなわち柳条(しま)を島という。今日、これに「縞」の字をあてる。

つけくわえていえば——。精(セイ:こまかき)糸をもつてかたく織りしめたものを縵(ケン:かたおりぎぬ, かとりぎぬ)という。わが国では一般にこれを絹(ケン:きぬ)という。麤(ル:粗, ソ:あらき)糸をもつてやわらかに織りあげたものを紵(シ:ふとおり, ふとり, ふとりぎぬ, あしぎぬ)という。わが国では一般にこれを紵(チュウ:つむぎ)という。

これら両者を、古代、帛(ハク:きぬ)という;漢代にいたつては繒(ソウ:きぬ)とよんだ。縞(コウ)は、この精縵すなわち縵を練りたるものを指す、すなわち、練絹(ねりぎぬ)である。

38) 染色が、織布の工程の先になるかあとになるかによつて、先染・後染の区別が生ずる。紵・銘仙・御召などは先染物、生絹・羽二重・縮緬・錦紗などは後染物の素原料(material)となる。また、錦・錦織・綴錦・金(銀)襦は前者であり、紵・紗・縵子などは後者の素原料であることが多い。

39) 生絹の場合、「拾壹疋」の献上織主は3人いる。この3人について、ひとつひとつ数量を記載して、「同」などとかたづけたいはない。それに反して、島絹では、島絹であることのみの記載で、したがつて可否はともかく、「同」と一括している。数量を問題にしていない。このことから、「御本」とあるのを「見本」と解釈したのである。叙述と実際の推論とでは順序が逆なのである。

40) 麻織物を布といい、その上品(高級品)を上布という。古来、布は庶民の衣料で、錦・綴あるいは綾・羽二重などの絹は貴族のものとされていた。武家はもとをたせば庶民であるから布をもちいる。絹が普及してからは、これを平服・下着(小袖)にもちいた。今日の式服は、当時の小袖である。上布は縮(ちぢみ)と同様に強撚糸をもちいて織られるが、後者の原料は片撚であるため浜(はま; ちりめんじわ)を生じ、前者のそれは駒撚——強撚諸糸(もろいと);強撚糸をあわせて逆方向に強

にしても慰斗目・紋付などにそめるのであるから後染物ということになわう。武家も貴族に列せられることもあり、公家（貴族）の式服は先染物であるが、それは単なる縞・緋のたぐいではない。（武家が不斷着に縞・緋をもちいるようになったのは寛政・享保以後とされている。）

とすれば、この見本は生産者として領主の行動であつたと考えられる。領主は、三右衛門・宇右衛門・仁右衛門らと同様に、かれ自身ひとりの商品生産者として存在していたことになる。この場合、第Ⅱ節の②の場合でいうところの間屋として、③の場合に相当する仁右衛門・七兵衛らを支配したいか、かれらの工場（作業場）を領主の直接の指揮・監督のもとにおいていたか、そのいずれれかであろう。前者とすれば、領主は伝右衛門・七兵衛らに原料をいつたん売り渡しておいて、ふたたび製品を買いもどすことになるであろう。いれにしても現在の化学繊維資本の系列支配とあい似たものであつたと考えられる。

さらに、近世における著作物⁴¹⁾のひとつ⁴²⁾は、当時のことごとについて、

「高山五兵衛其の比の本身 500 石にて絹師 12 人これあり、其次は某高祖父 450 石にて絹師 8 人差し置き候。御上初は 1,000 両にて桑も 300 両の運上なり。後々は義舟公（秋之喬知）御代に絹運上 2,000 両桑の運上 1,000 両にまかり成る 云じか」⁴³⁾

と述べている。喬知は明暦 3 年（1657）襲封ののち宝永元年（1704）に武州川越領に転封されるまで郡内領の支配地頭であつた。三右衛門の一件も、宇右衛門・仁右衛門、伝右衛門・七兵衛ら織主のことも、すべてこの「義舟公御代」のことである。

ともあれ、この著述から高山五兵衛も「某高祖父」とともに運上責任者（負担者）であつたことがうかがわれる。とすれば、かれらは自己の責任においてなんらかの経済行為をなす⁴⁴⁾ことの権限をもっており、

燃したもの）——であるため浜を生じない。もつとも、上燃と下燃の balance がとれていなければ、浜を生じてしまう。これを意識的におこつたものを駒燃縮（絹なら駒燃御召・縮緬）である。上布は縮とともに、今日、夏の衣料として珍重されている。

41) 文書・記録にくらべてはるかに信憑性はうすくなる。なんらかの目的をもつて事実を歪曲しているか、あるいは記憶・伝承の誤りをそのまま記述しているか、といった事態が考えられるからである。

42) 治績考中「古語菽麦」の引用より。発達史、p. 94。

43) ここにあげられた数字は大きすぎる。これは、この著者が自己の先祖の偉業をのちにいたつて後世の人たちに誇るためのものだからであろう。当然、記憶・伝承の誤りとともに著者による誇張とがはいっていたと考えられる。（後掲 44）

戦国を勝ちぬいてきた近世武士は数理・経済に明るかつたはずである。でなければ戦国の（武力戦・経済戦）に勝ぬくことはできない。その伝統の忘れ去られた近世中期になると、武士と商人の分離・分業がすすみ、武士は数理・経済に暗いことを誇るようになった。弾道計算も満足にできない（大砲の射撃指揮も十分にできない）ような武士になってしまうのは、近世中期以降のことである。

そうしたかれらのあいだで統計数値の伝承に誤りを生ずるのはやむをえないことでもある。経済（生産）規模にくらべて、運上高が過大であるか否かの判定をしようにもその基準をもたないのであるから。当然、誇張するにしても法外な値となるであろう。

44) 運上金上納という経済上の責任の存在は、その責任がともなわれるところの経済上の実体行為があるのでなければならぬことを示している。なんらの経済行為をすることなく、しかも運上の責任に負うということは正常・一般にはありえない（一時的にはありうるであろうが）。しかし経済行為からただちに運上負担という経済責任は生じない。経済行為にともなわれる経済責任は、その行為の対象・当事者に対して生ずるのであるから。運上負担はそれ自身一個の経済責任であるが、それは経済的強制によるものであつて経済的必然によるものではない。運上は領主のなんらかの給付に対する反対給付なのである。（本文後続参照）

かくして「某高祖父」は、高山五兵衛について藩財政に寄与するところ大なるものであつたのである、というのがこの著者の真意なのであろう。また、かくの如くに領主を先頭に殖産興業・経世済民の実をあぐべく努めたのである、と「治績考」の著者はいいたいのであろう。そして、この努力の結果が、千両、2千両の運上となつてあらわれたのである、と「古語菽麦」の著者は誇りたいのであろう。

その権限を安堵されることの代償として、つまり、権限安堵という〈給恩〉に対する〈報恩〉として運上を上納していたのであろう。

ここにいう「絹師」が、いかなるものであつた明らかなではない。「絹師」が織子であるならば、かれらは織主的存在であり、「絹師」が織主であるならば、かれらは領主的存在であることになる。ともかく、領主と同様に家臣も地主的⁴⁵⁾ないし商人的態度・行動をしていたことは事実であつたと考えられる。ここで、下級家臣の配下絹師は織子的存在、上級家臣のそれは織主的存在、ひとまず図式化しておくことにしよう。領領主が、紬「年貢」を現金納化して年貢〈永〉の収奪者として寄生化していく一方、依然として島絹については機能的存在として行動(活動)していたことからもうかがえるように、家臣もまた全くの寄生的存在としてとどまっていたのではないと考えられる。

ともあれ、かれらの経済行為の範囲・対象に農業があることに注目する必要がある。いいかえれば「桑運上」ということばがのこされていることが注目にあたいるのである。

案ずるに――、秋元氏の郡内入部に際してあらたに隨身した在地土豪・土着武士が、五兵衛・「某高祖」などによつて代表されるものではなかつたのかと思われる。隨身を誓つたものは、かれらのもつ貢租収権を移譲する、とともに貢租上納義務から解放される。そして、あらたにそれに見あう俸禄を下給されて安定した収入を約束されるこの〈給恩〉に対する〈報恩〉が、すなわち忠誠である。しかし、免租地における農業、それを基礎とする絹(絹・麻)に関する工業――農業の延長(一部)であるところの工業――に対する支配権を安堵される。〈給恩〉に対する〈報恩〉が「運上」ということになる⁴⁶⁾。

隨身することによつて、かれらは、以前もつていた権力よりも強大な権力をもつて、配下の農民にのぞむことができるのである。それは、織主の領主から供与される権威にくらべてはるかに強大な威力をもつていたのであろう。他方、かれらとは反対に、

「大谷現右衛門。此者、上総以来の御家人なり、深谷へ御供仕り候者は笹笠・大友・青木・長山4家相残る内なり。深谷より総社(上州総社)に移り某後郡内へ御供仕る処、郡内において絹運上・桑運上等いまた始まらざるうち⁴⁷⁾、絹師の方より冥加金として金子を相納め、1疋につき5匁(銀5匁)なり、その受取役なり⁴⁸⁾」

とあつて、まず譜代の家臣が冥加金の受け取り役であつたことがわかる。冥加(運上)を受け取るもの、それを支払うもの双方がともに家臣であつたことは興味をひく。そして、前者に譜代の家臣があてられていたことは、後者が新参の家臣ではなかつたか、という推論の起点ともなる。

それとともに、領主に、直接に冥加を上納する絹師もあつたことを、この著述はのべているのである。そして、この著者にしたがえば、かれらは、運上制のおこなわれる以前において、すすんで冥加を上納すると申しいられていることになる。運上は〈給恩〉があつて成立するのずのものであるが、冥加はこの点

45) この場合の地主というのは、第Ⅱ節の④の場合の地主という意味である。織機の貸しつけというだけの理由では、運上を負担するほどの商売をおこなえるにたる貨物はあつまらないであらう。

46) 運上は、〈給恩〉があでてしかるのちにおこなわれる〈報恩〉である。〈報恩〉は〈給恩〉に先行される。冥加は、〈特権〉を享受するためにまえもつて支払われる〈課役〉である。〈課役〉によつて先行されることのない〈特権〉は〈特権〉ではなく、本来の意味での〈権利(right)〉である。〈権利〉は〈義務(duty)〉に先行する。(第Ⅳ節、注64)

47) 紬運上は、紬「年貢」のかたちから、すなわち「交換」から〈収奪〉になつていく。初期には、桑運上は紬運上にふくまれていた。紬が桑畑の農産物であり、桑は免租地にあつたから。しかし、享保15年(1730)の郡内領小菅村の「差出書」に、同村所在の桑26束のうち1束は「前々永引」とあつて、残りの25束には桑永(桑年貢)の課せられていたことを暗示している。(前注)

48) 治績考中「旧家断絶記」。発達史、p.95。のちの絹・紬運上は、絹1疋につき銀7分、紬1疋につき銀3分5厘である(「万覚帳」元禄10年の記事。発達史、p.121)。この銀5匁は、のちの数字の7倍以上である。実際の生産実績に対するものではないとおもわれる。

ことなる。ということは、かれらは、少なくとも絹に関するかぎり、領主からなんらの〈給恩〉をえてはいなかったことを意味するのではないだろうか。いいかえれば、領主からそのかぎりでは支配をうけていなかったことを示すのではないだろうか。にもかかわらず、あらたに冥加の上納を申しでているのであるなにものかの下給をのぞんでいるにちがいないあるまい。かれらが、他者（家臣、それに準ずる織主）に隷属しているものであるならば、領主に対して直接の貢納義務やその権利を主張（申請）することはできないはずである。すくなくとも、他者からの独立とそれの安堵を要望するものであつたのではなからうか。いずれにしても、かれらの望むものは、かれらのもつ下級のものへの支配権の安堵であり強化であらう⁴⁹⁾。

かくして、領主を最高の生産（支配）者として、その下に、絹師を配下にもつ家臣・織主、織子を直接に支配する織主、さらには、家臣・織主・絹師の配下にありながら織子を支配するところの絹師、独立の絹師、そして花咲村三右衛門のような存在——という生産（支配）者の序列。みずから生産し販売するところの生産者、そして他の生産支配者・生産者のもとで生産労働をなす生産従事者、生産者生産従事者の補助・準備労働をなすところの生産従事者——という生産（従事）者の階層。かような Hierarchie⁵⁰⁾が、基本的な——農業における——生産関係と深い関連をもちつつ、なおそれとは独立に構築されていたのではないか、と筆者には考えられるのである。

そして、それぞれが、それぞれの市場（流通機構）をもつ。

49) 絹師には、さまざまな類型がある。上極には、織主と同等のもの、下極には織子とかかわりのないものもあろう。この著述のあつかっている時代は、かの貞享5年のはるか前、おそらくは半世紀も前の秋元氏の郡内領入部のころであらう。とすると、ここで冥加を申し出た絹師がのちの織主になつたのであるかもしれない。しかしともあれ、ここでは領主から織機に託して権威を付与されてはいないが、なんらかのかたちで地頭・給人などの保護（支配）をうけている生産（支配）者を絹師としよう。絹師は、やや広い意味（中義）の織主である。花咲村三右衛門は、（記録にあらわれるかぎりでは）織主とも絹師ともことなる。このようなものを在郷生産（支配）者といおう。かれは広義の織主であるともいえよう。